

ヒリュウ台「青島温州」の着果程度と翌年の着花量						
<p>[要約] ヒリュウ台「青島温州」の初着果年には樹幹上部を無着果にし、遊休枝を育成すると翌年の着花が確保され生産が安定する。着果2年目以降でも全面着果させると次年の着花が極めて少くなるので枝別摘果等による無着果枝の確保が必要である。</p>						
長崎県果樹試験場・常緑果樹科	専門	栽培	対象	果樹類	分類	指導
平成13年度長崎県果樹試験場業務報告						

[背景・ねらい]

現地圃場（琴海町）の、定植4年目の4年生ヒリュウ台「青島温州」において、初着果の程度が、その後の着花結実および樹冠拡大に及ぼす影響を明らかにし早期多収技術を検討する。

[成果の内容・特徴]

- ① 初着果年に全面着果させた着果量が多い区は、翌年の着花量が極めて少ない。着果させない区は、翌年の着花量は多い。初着果年に樹幹上部を無着果とする区は樹冠の拡大は最も小さいが、翌年の着花量は全面着果区より増加した（表1）。
- ② 新しょう量については、初年目に無着果にした区は翌年の新しょう量が少ない。また、2年目以降においても着花が多く着果過多樹になる区は、翌年の新しょう量は少ない（表1）。
- ③ 着果3年目になると中玉果実が多くなる（表2）。
- ④ 樹齢が進むと短い結果母枝の割合が高くなる（表3）。

[成果の活用面・留意点]

- ① ヒリュウ台「青島温州」の着果過多樹は新しょう発生が少ないので、結果母枝の確保が必要である。また、着花しても生理落果が多く、連年安定生産のためには樹勢の維持強化が必要である。
- ② 初着果年は、樹高が2.0m程度あることが必要である。また、収量や果実品質を考慮すると定植4年目以降と思われる。

[具体的データ]

表1 ヒリュウ台「青島温州」の初着果の程度と着花量、新しょう量

処 理	着花量		新しょう量	
	2000 (1～5達観)	2001	2000 (1～3達観)	2001
全 面 着 果	1.2	5.0	2.7	1.0
樹上部無着果	2.0	4.8	2.2	1.0
無 着 果	4.1	2.3	1.0	1.9

注) 2000年5月11日、2001年4月27日着花新しょう量調査

表2 ヒリュウ台「青島温州」の初着果の程度と年次別収量

処 理	収量/樹			1果平均重			葉果比			着果数/m ²		
	1999 (kg)	2000 (kg)	2001 (kg)	1999 (g)	2000 (g)	2001 (g)	1999	2000	2001	1999 (個)	2000 (個)	2001 (個)
全 面 着 果	8.2	8.4	17.4	122	183	109	31.4	98.4	17.9	13.9	8.3	35.9
樹上部無着果	9.0	10.2	16.9	130	177	115	31.5	60.7	23.1	15.7	11.0	32.3
無 着 果	—	13.6	20.0	—	146	157	—	44.4	29.3	—	14.8	24.3

注) 2年目からは全処理区全面着果とした。

表3 ヒリュウ台「青島温州」における初着果の程度と結果母枝の発生割合

処 理	結果母枝の発生割合 (%)						結果母枝数*	
	5 cm未満		5～20 cm		20 cm以上		2000	2001
	2000	2001	2000	2001	2000	2001		
全 面 着 果	47.0	76.6	46.9	21.1	6.1	2.3	225.5	152.5
樹上部無着果	46.7	74.5	47.1	24.0	6.3	1.5	232.5	165.5
無 着 果	76.7	64.1	22.6	33.9	0.7	2.0	164.4	313.8

注) * 結果母枝数は、1主枝当たりの平均値
2000は着果2回目、2001は着果3回目の着果後の結果母枝数

[その他]

研究課題名 : 温州ミカンの品質保証果実の少資材・低コスト生産体系の確立
 予算区分 : 国庫(地域基幹)(平成11～15年)
 研究期間 : 平成13年度
 研究担当者 : 古川 忠
 発表論文など : なし